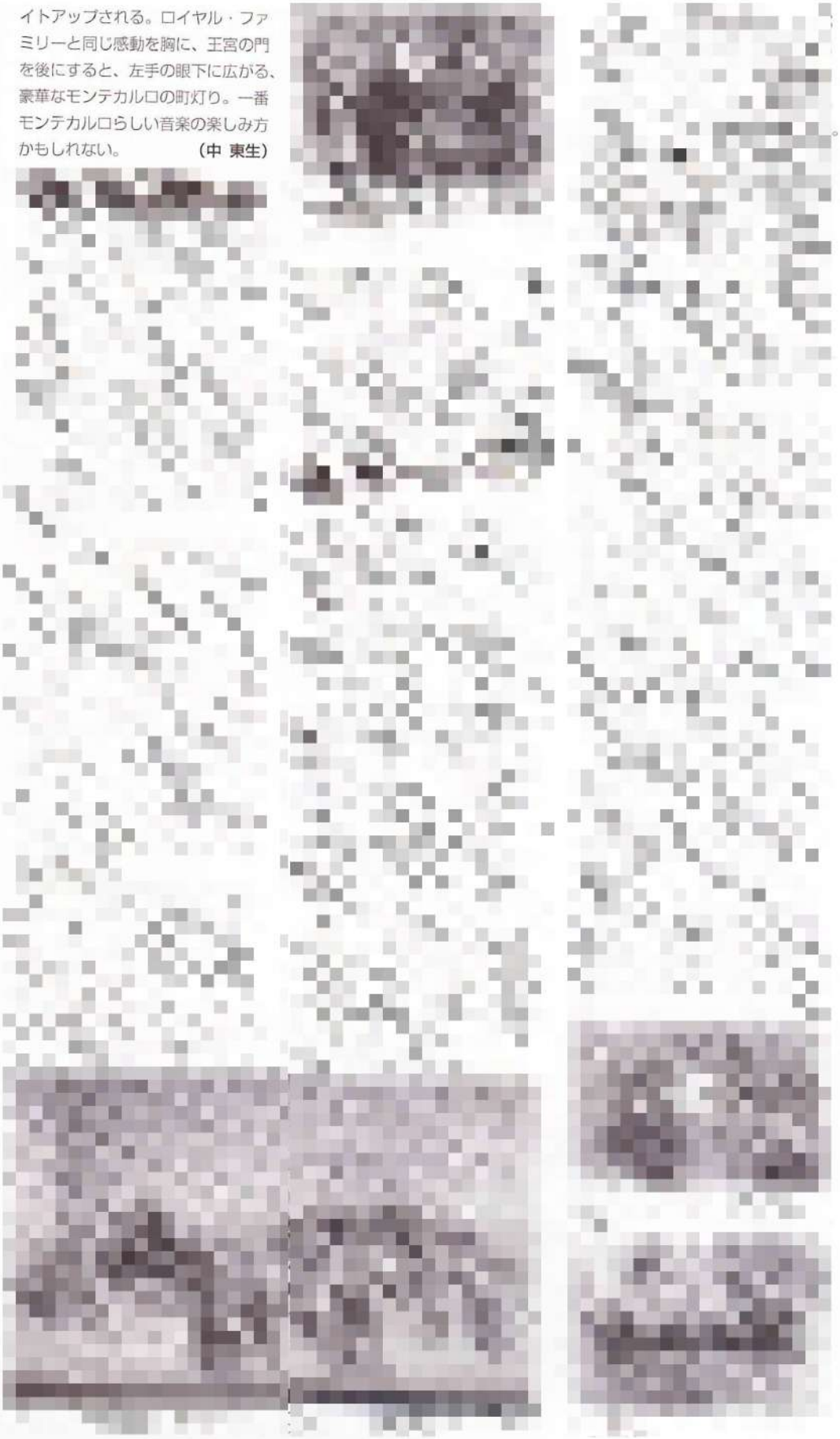
コンサート モンテカルロ交響楽団の大公宮殿コンサート

毎年7月にモナコ・モンテカルロの大公宮殿の中庭で開かれる野外コンサートの1つを聴いた。故レーニエ大公もよくお姿を見せられていたそうだ。今回アルベール王子は出席されないおつもりだったと聞いていたが、前日のリハーサルの様子を王宮のどこかで耳にし、お気に召されたのだろうか、ご予定を変更なさって臨席された。

2年前の同シリーズで好評だったサンティが、前回同様アドリアーナ・マルフィージ(S)に、今回はキューバ出身のアメリカ人ラウル・メロ(T)を連れての、プッチーニの夕べだった。休憩のない、短めのコンサートが常なのは、休憩中に観客を移動させる場所のない立地条件や、ロイヤル・ファミリーの便を考えてのことだろうが、今回は盛り沢山のプログラムだった。メインの曲目は《ボエーム》と《蝶々夫人》で、アリアとデュエットがちりばめられ、その他、《マノン・レスコー》、《トスカ》、《妖精ヴィッリ》、《修道女アンジェリカ》がはさまれている、日本人も好みそうな選曲だった。来年《ボエーム》で来日予定の3人を聴けたのは興味深かった。必ずしもプッチーニアーナとは言えないマルフィージの声、ロドルフォの甘さが少々欠けるメロ、という組み合わせではあるが、数年前ナポリのサンカルロ劇場で共演している3人の緻密な音楽作りは、《ボエーム》の新しい面を見せてくれた。

モンテカルロ響の音は、リハーサルからどんどん伸びやかさを増し、本番では指揮者の棒を的確に表現した音色で、素晴らしい演奏を聴かせてくれた。普通の演奏会と明らかに違うのは、ステージ上の楽団員が、最後列にいらしたロイヤル・ファミリーのご退席を見送ってから、退場することだ。楽団員、観客、すべてが君主と同席することに慣れていて、この小さな国の主は、国民に愛されて、誇りに思われていることが伺えた。

開演前に中庭を囲んでいる回廊の屋根の上から見えた山が、演奏中にはすっかり闇に姿を消し、壁画がライトアップされる。ロイヤル・ファミリーと同じ感動を胸に、王宮の門を後にすると、左手の眼下に広がる、豪華なモンテカルロの町灯り。一番モンテカルロらしい音楽の楽しみ方かもしれない。 (中 東生)